

能登の宿谷氏について

山口正義

一、はじめに

『宿谷氏の賦』¹⁾を読まれた千葉県大網白里市の宿谷圭子様から、この本に出会ったことへの感謝と、能登の宿谷氏のルーツについて記した手紙を頂きました。その手紙のルーツの内容と、その後のさらなる手紙や電話で伺った話などをまとめると、ルーツに関する内容は次のようなものでした。

①宿谷圭子様は石川県鹿島郡中能登町良川の出身。同地に宿谷姓の家が十軒程あるといえます。宿谷氏の先祖は、小田原北条氏に仕えた家老の松田氏とともに能登に来たのではないかと考えているとのことです。また、宿谷氏には三代、松田氏から嫁が来ているとのこと（詳細不明）。

②同地の宿谷姓の菩提寺は七尾市小島の浄土宗寶幢寺^{ほうどうじ}。宿谷姓の古い墓は無いが、家紋は「違い釘抜き」(下図)で、能登に来てから家紋を変えたのではないかと推測されています。「前田氏に仕えるために家紋や宗教も変えて生きて来たように感じます」ともいいます。

寶幢寺の住職等が宿谷姓の先祖の歴史(ルーツ)を調べたがわからなかった、ということ。なお江戸時代、良川の宿谷本家は代々「平右衛門」を名乗っていて、過去帳に初代は「天外露晴禅門 慶長三年一月」、二代は戒名は省略しますが「寛文六年十二月」とあるとのことでした。

③寶幢寺は「山の寺」寺院群の一つ。同寺が現在地に移ったのは江戸の初め。その前は真言宗で石動山(いするぎやま、とも。国史跡)にあつたといっています。

「山の寺」は前田利家ゆかりの山の寺寺院群として有名で、利家が軍事上の目的で周辺の寺を集め、家臣の菩提寺にしたとのこと。そこから宿谷氏も前田の家臣であつたと推測されています。

④一方で、地元では平家の落人としか伝わっていないとのこと。また、石動山では山伏的な役割をしていたのではと推測されています。

(なお、いただいた「山の寺」のパンフレットによれば、寺院群は天正年間に前田利家が能登の国領主として小丸山城(七尾市)築城時に奥能登方面からの防御陣地に転用する目的で寺院群を配置したといえます。また寶幢寺が浄土宗に改宗し現在地に移つたのは明徳二年(一三九一)とあります)

このようなことを知り、能登の宿谷氏のルーツを少し調べてみたいと思いました。しかし、能登に行く機会をなかなか持てませんでしたので、調査は主に文献やネットからの調査になりました。キーワードは小田原開城時の「北条氏直の高野山行」と、北条家の重代の筆頭家老「松田氏」です。

二、幾つかの調査

(一)『毛呂山町史』より

宿谷氏は武蔵七党の児玉党より端を發し、鎌倉幕府の御家人(將軍と主従關係を結んだ武士)として活躍した名族でした。この宿谷氏について体系的に詳細に論じたものに『毛呂山町史』²⁾があります。同書は宿谷氏の系図について三系統(大谷木本、葛貫本、浅羽本)があるとして論じています。小田原開城を念頭においてみると、宿谷氏系図(4)(図1)に示す浅羽本)の定行(矢印)に行き当たります。

宿谷氏が北条氏の麾下に入ったのは定行の父重近(本行)の時のようです。浅羽本の系図書には「重近(本行)



次の文は「松田家の歴史」⁷⁾などより抜粋したものです。

「松田直秀 松田家11代。別名直憲、直定、憲貞、秀治、英春、左馬助、四郎左衛門。一五八三年父憲秀より家督を相続。直秀は北条氏直に仕え、小田原開城後は氏直の供をし、紀伊国高野山に家来筆頭として同行した。直秀は北条家の再興に奔走し、氏直は翌一五九一年下野足利等で一万石の大名に取り立てられ、秀吉はさらに翌年伯耆一國、十萬石の大名に取り立てようとする意志を示したが、氏直の突然の病没に望みは絶たれる。直秀は氏直より一五九一年六月一七日に感状を賜っている。直秀は氏直没後一時、関白豊臣秀次に仕えたが、関白没後は加賀藩前田利家が世中に子息の前田利長より加賀藩に召し出され四千石で召抱えられた。直秀は四郎左衛門直憲と名を変えた。一五九九年直憲は徳川家康と通じた大峪城主片山延高を利長の命により上意討ちした。また直憲は前田利常に命ぜられ公儀御普請のため、御普請奉行として越後国に赴き、慶長十九年(一六一四)年七月二三日同地で病没した」と。

つまり、直憲は高野山で氏直の病没後、前田加賀藩に四千石で召し抱えられているのです。

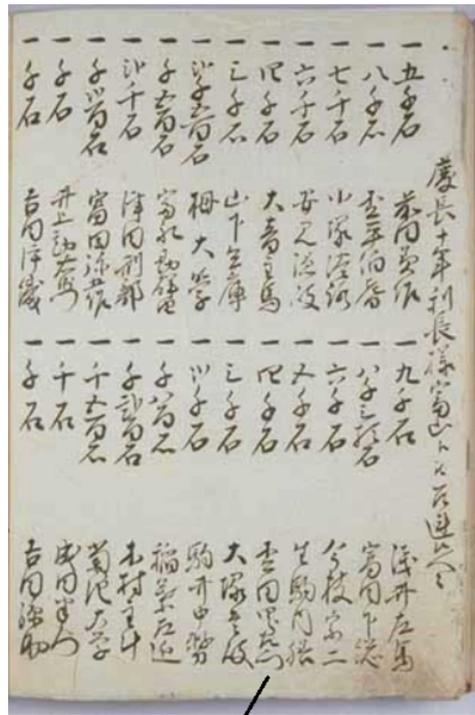
(四) 加賀藩の侍帳より

地元の羽村図書館にあった『石川県姓氏歴史人物大辞典』⁸⁾で、「宿谷」を引くと、「加賀藩士に宿屋氏がある。慶長十年(一六〇五)富山侍帳に宿屋六右衛門、元和元年(一六一五)侍帳に宿屋六左衛門、寛永四年(一六二七)侍帳に宿屋弥五兵衛、寛文元年(一六六一)侍帳に宿屋八十郎の名がある(初期の侍帳)」とありました(侍帳とは大名家家臣の名や禄高、地位、役職などを記したものです)。

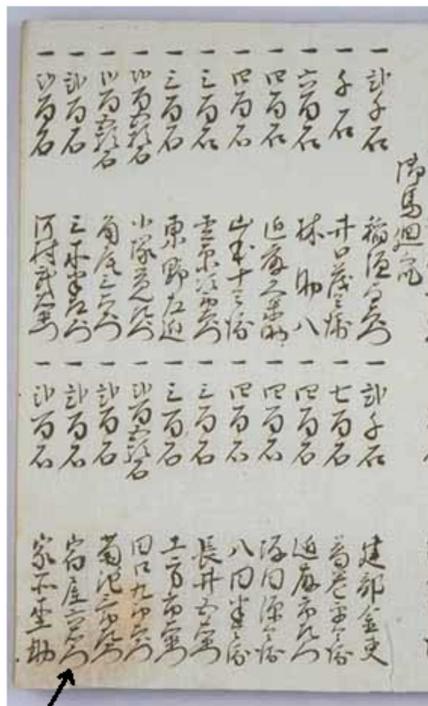
この記述をもとに「加賀藩の侍帳」などでネット検索すると加賀藩の侍帳に関する具体的な情報が得られました。幾つか示しますが、主に「石川県立図書館貴重資料ギャラリー」⁹⁾からのものです。

①慶長十年(一六〇五)富山侍帳

この侍帳は、加賀藩二代藩主前田利長が、富山に隠居した慶長十年に金沢から引き連れてきた家臣団を記したもので、冒頭「慶長十年利長様富山江被召連候人々」とあります。数えるとその人数は四二九人に上ります。内容的には側近衆・御馬廻衆・大小将衆・児小將衆・詰小將衆・廊下番・御台所衆・御台所番衆・組外衆・新座衆・歩衆・高岡御残衆・御切米取衆・御掃除坊衆・御餌指・御坊様衆・御切米金銀被下衆・諸職人の家臣達です。諸職人には竹屋、銀屋、鞆屋、紺屋、鍛冶屋、鉄炮屋、大工、塗師、畳刺、壁塗、瓜作、御細工者、絵画などが含まれています。そして側近衆に「四千石 松田四郎左衛門」とあります。四郎左衛門は直憲のことです。御馬廻衆には「二百石 宿屋六右衛門」の名が見えます。宿屋六右衛門の名は次の「慶長之侍帳」にも出てきます。



松田四郎左衛門(直憲)
図2 慶長10年富山侍帳(1/2)



宿屋六右衛門
図3 慶長10年富山侍帳(2/2)

②慶長之侍帳

この侍帳は慶長十七〜十九年(一六二二〜一四)のもので、「越中 二百石 宿屋六右衛門」とあります。これは明らかに前述の富山侍帳の宿屋六右衛門と同一人物と思われる。宿屋六右衛門の名は以後の侍帳には出て来ないので、あるいは富山で終わったのかも知れません。富山近くの射水市には宿谷姓の人がいます。

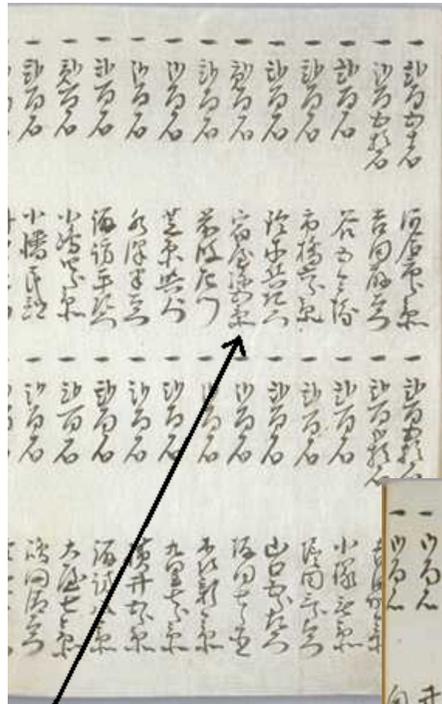
また、松田四郎左衛門(直憲)は既述のように慶長十九年に亡くなっているためか、その名は見つかりません。ただ、「越中 五百石 十五人 松田左京」というのはあります。松田左京が直憲と関係あるのかは不明でした。

③元和元年(一六一五)侍帳

御馬廻組で「二百石 宿屋六左衛門」とあります。「六右衛門」とは読めず、六右衛門とは別人物と思われます。またここにも御馬廻組で「五百石 松田左京」とあります。



図4 元和元年(1615)侍帳

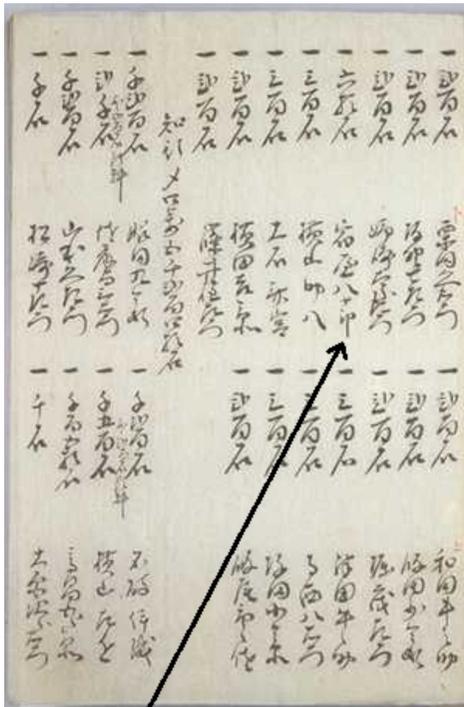


宿屋弥五兵衛
図5 寛永4年(1627)侍帳

④寛永四年(一六二七)侍帳
御馬廻組で「二百石 宿屋弥五兵衛」とあります。ここにも御馬廻組で「五百石 松田左京」とあります。

⑤寛文元年(一六六一)侍帳

この侍帳には御馬廻組で宿屋八十郎の名が見えます。但し六十石になっています。同じ組には松田四郎兵衛(憲次)(三百五十石)があり、定番御馬廻組には松田熊之助(憲郷)(百五十石)の名が見えます。直憲の四千石は次の代には四郎左衛門(憲成)が二千石、治郎右衛門が一千石を引き継いでいますが、憲成は元和元年に病没絶家、治郎右衛門は御暇乞東国へというところで、残りを憲次及び憲郷と二人の娘婿が継いでいます。



宿屋八十郎
図6 寛文元年(1661)侍帳

⑥加賀藩組分侍帳(文久の初め頃(一八六一年頃)作成)

この侍帳には「宿屋(谷)」の名はありませんでした。この時期になると宿屋(谷)氏は家臣ではなくなった

ようです。一方、松田氏は四千石で抱えられ御馬廻役でしたが、石高の変化はあるものの、明治四年の廃藩置県まで加賀藩臣として存在しました。

三、まとめ

小田原開城時の北条氏直の高野山行きに松田直憲と宿谷定行がお供で同行していたこと、そして氏直亡きあと直憲は加賀藩に四千石で抱えられ、その加賀藩には宿屋氏がいたことが裏付けられました。高野山からの加賀行きが具体的にどの様なものであったかは定かではありませんが、宿谷定行の関係者（身内人）も直憲の加賀行きに加わり加賀藩に採用されたと考えられるにそう無理はなさそうです。それが宿屋六右衛門だったのではないかと想像します。六左衛門や弥五兵衛、八十郎などは六右衛門の跡を継いだ身内のものだったのではないかと想像します。

一方、冒頭に述べましたように中能登町良川の宿谷本家は「平右衛門」を名乗り、初代は過去帳に「天外露晴禅門 慶長三年一月」とあるとのことでした。慶長三年といえば小田原開城から八年目で、その頃亡くなったということであれば、宿谷（宿屋であったらう）を名乗った「平右衛門」は六右衛門らと一緒に加賀行きの中にいた人ではないでしょうか。そして菩提寺が「山の寺院群」の一つということは加賀藩との結びつきが考えられます。しかし侍帳にその名がないところを見ると、仕えたとしても早い時期に仕官を辞めているのかも知れません。歴史的事実をロマンで語るのは憚れますが、仕官をやめて能登に来て農業に勤しんだような気もします。過ぎ去ったはるかかなたを想うときも晴々として、悔いの無い生涯を「天外露晴」と表現したと考えるのは穿ち過ぎでしょうか。

ともかくこのようなことから、加賀藩や中能登町の宿谷（屋）氏のルーツは明らかに毛呂山町宿谷を本貫地とする宿谷氏の同族であろうと推測できるのではないかと思います。なお、江戸時代前期までは「宿谷」は「宿屋」であったというのが通説で、侍帳はそれにも合致しています。

最後に全国の宿谷氏について簡単に触れます。ホームページで調べると、宿谷姓は中能登町良川の他に、滋賀県甲賀市水口に三十五軒、滋賀県愛荘町深草に九軒、京都市伏見区に六軒などがあります。甲賀市水口や愛荘町深草などには何らかの歴史的背景を感じます。今後の課題にしたいと思います。

（謝辞）中能登町良川の宿谷氏の情報を提供して頂いた宿谷圭子様に感謝しお礼を申し上げます。

参考文献

- (1) 山口満『宿谷氏の賦』（まつやま書房、平成26年）
- (2) 『毛呂山町史』（埼玉県毛呂山町、昭和53年）
- (3) 『改訂 関八州古戦録』（中丸和伯校注、昭和51年、新人物往来社）
- (4) 『戦国時代年表 後北条氏編』（下山治久編、2010年、東京堂出版）
- (5) 『姓氏家系大辞典』（太田亮、昭和47年、角川書店）
- (6) 『日本人名大辞典』（1979年復刻版、平凡社）
- (7) ホームページ「松田家の歴史」
- (8) 『石川県姓氏歴史人物大辞典』（平成10年、角川書店）
- (9) ホームページ「石川県立図書館貴重資料ギャラリー」
- (10) 国立国会図書館デジタルコレクション・加賀藩初期の侍帳
- (11) 国立国会図書館デジタルコレクション・加賀藩組分侍帳
- (12) ホームページ「ネットの電話帳」<https://jpou.xyz/m/2007/宿谷>